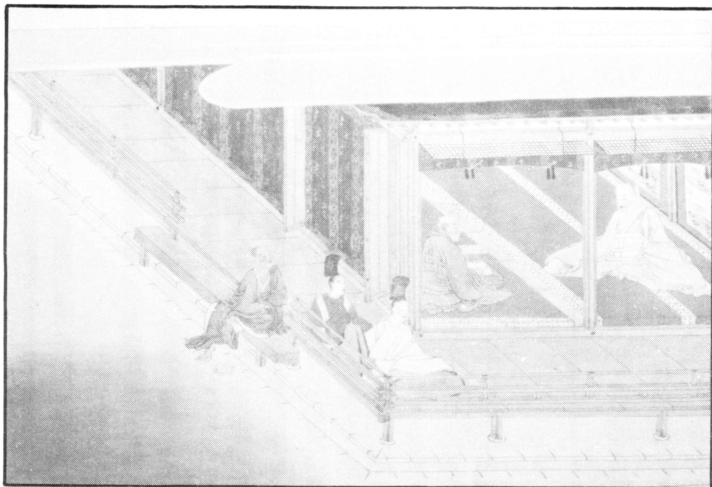


みかえり

第42号



法然上人行状絵巻

ゆきのうちに

佛のみなをとなうれば

つもれるつみぞ

やがてきえぬる

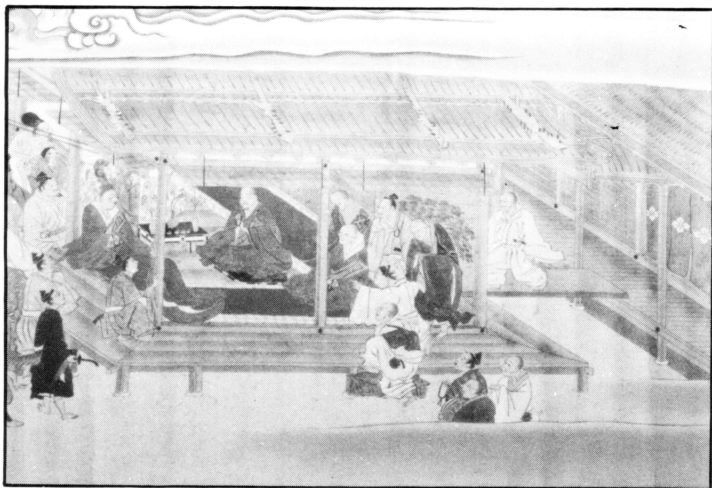
(法然上人御歌)

年月は容赦なく過ぎ去って行きます。

お互い人間は春夏は春夏のように、秋冬は秋冬に
応じた備えをして日暮らしをし、雪に埋もれた厳
寒の生活にも堪え忍んで生きて行くのです。

それらの生活の中で、私たちの人間の本性にお
いて、その身心に重くのしかかっている煩惱があ
ります。その憂悲悩苦の根源を除去しなくてはな
らないのです。

新しい年を迎えるにあたり、過ぎ去った一年間
の罪や災いをすべて洗いなおして、清らかなお念
佛の生活で暮らしたいものです。



法然上人行状絵巻

さへられぬ

光もあるを おしなべて

へだて顔なる

朝がすみかな

—— 法然上人御歌 ——

この冬は、寒さが酷しく雪も多い年です。寒さが続くと、暖かい太陽の光を求め、太陽のありがたさを感じるものです。

日常生活で、電気・電話・ガス・石油などのない暮らしは、あり得ません。停電になって不平をいうのは、余りにも身勝手ではありませんか。

法然上人は、弥陀の大慈悲の光明が、あらゆる人々の頭上を照らし、平等に然かも永遠にお守り下さるのだ、と説いておられます。

無量寿、無量光の大慈悲は、尊大そのもののものです。自分のことはかりを考える人や、信仰心のない者は、折角のお慈悲を拒否しているのです。

法然上人は、無意識にしろ邪道におちいつている人を戒められ、生き甲斐のある、お念仏の喜びを、お教え下さっているのです。

池の水

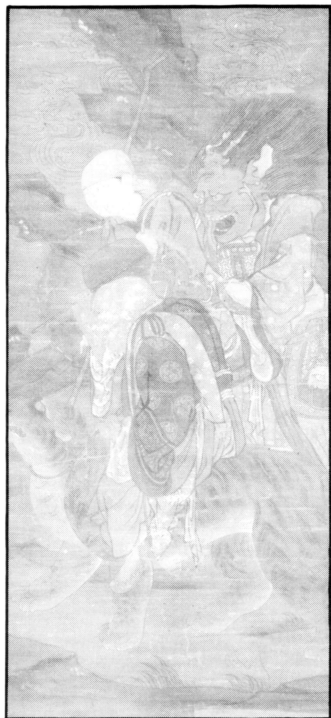
ひとの心に

似たりけり

にぎりすむこと

さだめなければ

——法然上人御歌——



十六羅漢図

青少年の非行、中高校生の校内暴力事件などの頻発が、大きな社会問題になっています。親や教師、世間の人達から放任された落ちこぼれ者の、せめてもの抵抗かもしれません。

うちの子だけは、そんなことはないと思っ
ても、何時しか知らず知らずのうちに、親、教師から離れていってしまう。

これが、先生と生徒、親と子の心の断絶であって、宗教心の欠如による、餓鬼畜生的な人間になってしまふのです。これは人間喪失に他なりません。

これは、子供や青少年の曖昧な心構えによる結果であるが、それ以上に、親や社会に責任があると思われます。

今こそ、お互い、人を尊ぶ心をもち、「お早よう」「おやすみなさい」「ごちそうさま」「はい」「すみません」「ありがとう」と、我声に素直に出したいこの言葉や、せめて感謝の合掌が出来る身を養いたいものです。

往生は

世にやすけれど

みな人の

まことの心

なくてこそせね

——法然上人御歌——



十六羅漢図

総本山禪林寺において、昭和五十六年度の法脈相承（加行）が、如法に修行されました。本年は八名の加行僧が、祖山を念仏行直し午前四時、十時、午後三時と三回、加行場において水をかぶる。水行の水飛沫の中に立つ、行人の清浄な姿。「沐浴身体、当願衆生、内外香潔、身心無垢。」の気合いのかかった誦文の聲が一山に響きわたる。

この一瞬こそ、清らかな尊い厳肅な一瞬であり、寸時といえども気の緩みは許されない。一瞬の油断は、体調の変化に影響をおよぼすことになる。水行が終れば上堂し、三時間にわたって礼拝、勤行作法と続くのである。

こうした初発心に打ち込まれる身行は、僧侶としての生涯を決するといっても過言ではない。あらゆる文化水準が高められて便利になり過ぎ、殺伐な気風が渦巻く世相なればこそ、「決定往生」と真剣に打ち込む精進求道の姿が、今最も求められているのではなからうか。

われはただ

仏にいつか

あふひ草

心のつまに

かけぬ日ぞなき

——法然上人御歌——



十六羅漢図

今、総本山永観堂は全山新緑生々、一日一日と盛り上る新緑の美は、秋の紅葉と対照的に、一味違った趣がある。

東山山麓から放生池までの、緑の森からわきあがる静寂さは、あらゆる騒音に汚されている人びとの心に潤いを与えてくれます。

若葉に包まれた境内では、若人たちが三三五五に語りあい、知らぬまに「顧阿弥陀如来さま」の慈眼の中にひき寄せられていくのです。

あまりにも、無味乾燥な人間関係が多い世相だけに、一木一草一葉にいたるまでお念仏の声が染みとり、み仏の心に包まれた新緑の中で、心を洗うことは、すばらしいことです。宗祖の心も全く仏心そのまま、「煩惱是非のこの身このまま、ただ切に生かし給う、み仏へのお念仏を忘れるな」と。この一点は実に厳しくお説きになっておられます。



旅立ちの法然さま 誕生寺

極楽へつとめてはやく
いでたたば
身のおはりに
まいりつきなん

法然上人御歌

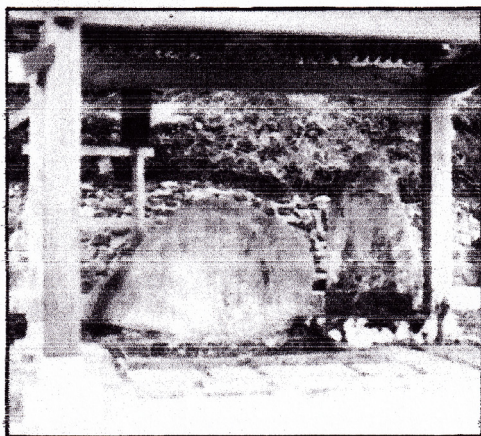
今の日本は、學歷社会だと言われている。よき學歷があれば、一流会社に就職できるのが常識になっています。そのため、親たちは何かなんでも一流大学へ入学させようと、せっせと働いて、頑是無い幼い子供を、幼稚園の頃から塾へ通わせているのです。

なんと世知辛い世の中ではありませんか。

こうしたことが当り前になって、これが逆に不自然な、ひ弱な子供がつくられていくようです。もう少し、自然の理にかなった、のびのびした子供に育てられないでしょうか。

法然上人は、幼少の頃より、竹馬に乗って遊ぶかたわら、西に向って常に合掌礼拝されていました。強い人になろうという願いもあったのでしょう。しかし、父の夜討による死の逆境にもめげず、學歷をも捨てられ、求道の道を進まれた法然さまなのです。

真の幸せを念じ、今一度原点を振り返ってみる時ではないでしょうか。



法然上人(勢至丸)誕生湯の井戸 誕生寺

破戒も持戒も、貧窮^{びんぐう}も福人も、

上下の人をきはらず、ただわが名号をだに念ぜば、

いし、かわらを変じて、金^{かね}となさんごとし、

来迎せんと御約束候也

(往生浄土用心)

隣人との関係において、信頼が基礎となります。
通り魔殺人事件は、この信頼が欠けたために起きたのです。悲惨なことです。

このような事件は、決して他人事ではありません。よくよく反省すれば、あなたの周囲にも、信頼の歪みが発見できるではありませんか。

阿弥陀様への信も同じこと。自分勝手に色をつけて、自分勝手に信じていては、歪んだ信仰になります。

正しい信仰をもち、それを深めていくことが、何よりも重要です。そうすれば、石や瓦を金にかえてしまうことができる、信仰は不可思議です。

総本山 永観堂禅林寺

わたくした

ちの、普段何

げない生活の

中にも、信頼

は必要です。

親子、兄弟、

夫婦、友人、

天に仰ぎ 地に臥して

悦ぶべし

このたび弥陀の

本願にあうことを

(小消息)



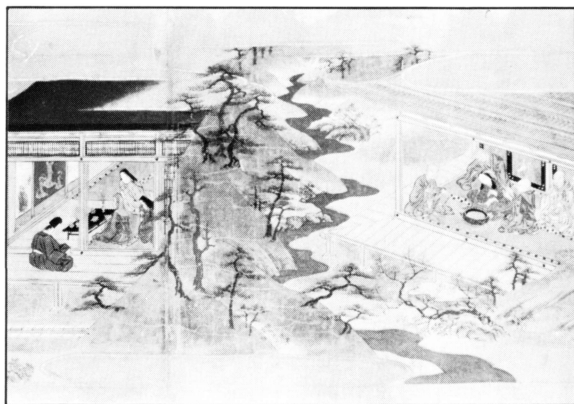
秋草図 襖絵 (部分)

偉大な宗教家の伝記には、必ず感動の一場面が綴られています。

法然上人も、善導大師『散善義』の一文にあわれた感激を「身毛よだちて」と伝えられています。

この法然上人の感動は一瞬のものでなく、永遠です。念仏往生の感動は永遠です。

それ故、私たちも深い宗教的感動を得なければなりません。弥陀の本願にあえる深い感動を。



起縁仏念通融

「十方の衆生わが名を唱えば、乃至十声までも迎えん」と誓いを建てたまいいけるは、ただ念仏申さばみな往生す、ということなり。

法然上人・念仏往生要義抄

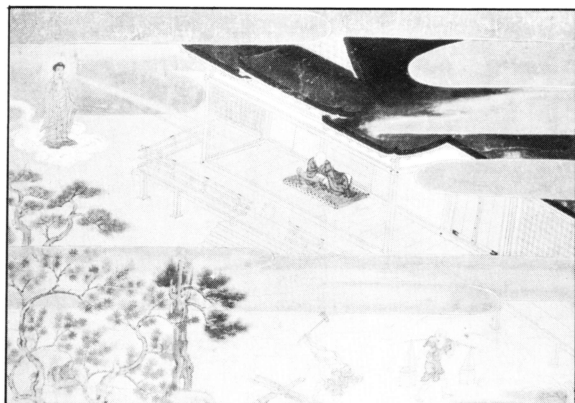
方です。この「本願一途」という立場は、わが国に仏教が伝わって来、法然上人に至るまで六百年もの間、だれも説かなかったことでした。法然上人が、自らの信仰境地を「浄土宗」と名乗られたのは、純粹に本願を取り上げられた、まさしくその証しなのです。

本願とは、私たち衆生を平等に救うべく、阿弥陀仏の側で建てられた誓いであって——そこには四十八願総じて、衆生を救いとする仏としての自身の相、衆生を摂め取る浄土の相、そこに救われた暁の衆生の相が誓われています——、しかもその誓いがことごとく成し遂げられてあるところに、その意義があります。

では私たちは、どのようにすれば阿弥陀仏の救済にあずかるのかといえは、第十八の願「我（阿弥陀仏）が名をたとえ十声でも呼ぶ者はだれであろうと、救い取らずにはおかない」に應えることであって、それがとりもなおさず、口に称える「南無阿弥陀仏」の念仏なのです。

総本山 永観堂禪林寺

法然上人は、阿弥陀仏がお建てになった四十八の本願の意趣を一つずつ領解された中から、この本願によって、私たちのような無善の凡夫（衆生ともいいます）が救われる道を顯示された



融通念仏縁起

我等ごときは、

すでに戒定恵の、
かいじょうえ

三学の器にあらず。

法然上人（勅伝巻六）

三学無分（三学の器ではないこと。〓

仏道修行の何一つできない私）、この自覚

こそが、念仏行者の出発点であります。

智恵第一のほまれ高き宗祖法然上人は

「我等ごときは、すでに戒定恵の三学の器にあらず。この三学のほかに、我が心に相応する法門ありや、我が身に堪へたる修行やある」ときびしい自己内省に裏付けられた、求道のすえ、凡入報土（愚かで罪深い私共が阿弥陀仏の浄土に生まれること。）のお念仏との邂逅がありました。私共は生活に追われ、時間を空費して、ナカナカに自己をみつめることはできません。しかし、この三学を「実践せよ」と云うのはありません。三学無分そのままに、凡入報土のお念仏を頂くのみであります。

仏は一切衆生を憐みて渡し給えども

善人を見ては喜び

悪人を見ては悲しみ給へるなり

(念仏往生義)

地獄に堕ちているひ

とは、今自分のいると

ころが地獄だとは知ら

ないという。そして、

ほんとうの苦しみや悲

しきに出会わなかったひとは、ひとの喜びも寂しき
もわからないという。

法然上人は、巷に満ち満ちた叫びの声をのが苦
しみとして、ともに、脂のような汗と深い涙を流さ
れた。きっと様々な逆縁を背負われた深い悲しみが
宿っているに違いない。

苦しみや悲しきを経験してゆくごとに、ひとは瞳
が澄んでいくという、いや、澄んでいかなくはな
らない。

法然上人のように、眉間にくもりのない、深い悲
しみを抱いた「おん目涼しく澄んだひと」になりた
く思う。

総本山 永観堂禅林寺



起縁仏念通融



融通念仏縁起

死^しなば

浄土^{じょうど}へ参^{まい}りなん

成長するまでの三、四年、あの大海原を自由に泳ぎまわり、数千キロの旅をしたサケは、旅の終りに、最後の大事な仕事である卵を生むために、ふるさとの川へ帰ってきます。

サケという魚でさえ、自らが最後に帰っていくところを知っています。生きものの中で、もっともすぐれていると自負している人間が、生命^{いのち}終るとき自分の帰っていくところが心の中にしっかりと定めていなかったなら、それほど悲しいことはありません。

ご先祖様たちが帰っていかれたアミダ様のお浄土へ、私たちも必ず帰っていくのだと確信したいものです。